

一朝の礼拝から 1

「キリスト山に登る」

列王記上 20 章 22～23 節

日本では初日の出を拝みに山に登ることがあります。小さい頃は山での遭難のニュースを見て、なぜきつい思はっいをして危険な登山をするのか不思議でした。長じて日本史の研究者となり、日本の修験道では、断崖絶壁を登り、種々宗教体験をする事を知りました。天台宗には回峰行がある事も知りました。またラジオで著名な登山家が、吹雪の山中をひたすら歩いていると、故郷の実家の幻が本当に目の前に現れると話していました。聖書には山に登る話がよく出て来ます。イスラエル人は最初、山地にいたので、その神は、平地のカナン人からは「山の神」と呼ばれました。前宗教主任の二瓶先生が話された、夜のシナイ山に登った時の様子—暗くて険しい山道を登り、夜が明けた時の神々しい山の風景—も聴きました。キリストもよく山に入って祈っています。

日本で有名な吉野山は、桜の名所で、修験の山でもあり、672年の壬申の乱では、ここに隠棲していた大海人皇子（後の天武天皇）が、東国に脱出して挙兵しています。後世、後醍醐天皇もここに逃げ込み、南朝は50年以上も室町幕府に抵抗しました。

著名な史跡なので9年前に私も行ってみました。吉野山でバスに乗ると雪が強くなり、山頂に着くと吹雪となって、樹木の黒い枝は白く覆われ、お堂の手水が凍っていました。下りのバスが来るまで周りを見ていると、雪が止んで少し明るくなり、下の人里が見えました。百人一首に「朝ぼらけ 有明の月とみるまでに 吉野の里に降れる白雪」という歌があります。天から下界を見下ろすような感覚がしました。宇宙飛行士が、宇宙から地球を見て帰ると、宗教的人間になるという話があります。キリストが山から見下ろした時、同じ気持ちがあったのだろうかとも想像しました。吉野山に登って、少しキリストに近づいたような気がします。

細井 浩志（日本文化学科）

一朝の礼拝から 2

ペトロの手紙 I 4 章 8～10 節

「花も」

内越 努 詞・曲

ここに 泉は湧く 涙を過ぎるとき
 やがて 実を結ぶ 笑い声に満ちる
 花も 雲も 風も 大海も 奏でよう 奏でよう イエスを
 空に響け 歌え 魂よ 恵みを 恵みを 恵みを

仰げ 天は開き 僕らは見るだろう
 やがて 花は咲き 栄光の主は来られる
 花も 雲も 風も 大海も 奏でよう 奏でよう イエスを
 空に響け 歌え 魂よ 恵みを 恵みを 恵みを

「大いなる方に」

H・スミス 詞・曲 高橋 久美子 訳詞

大いなる方に 感謝ささげます 御子キリストの 愛のゆえに
 聖なる方に 感謝ささげます 御子キリストの 愛のゆえに
 今 弱い者よ 叫べ 勇士だと
 勝利の主が 共におられる
 今 貧しい者よ 叫べ 富んでいると
 恵みの主が 共におられる 感謝します

(聖歌隊奉唱)